

トピックス
1. 戦争と平和
2. 南国土佐を後にして 高知編



福留経営労務管理事務所  
 姫路龍馬会  
 社会保険労務士・行政書士  
 福留 章

<h1>龍馬通信</h1>	No. 56
	2022年8月号

## 立秋～処暑の候 「夏休みの友」

子供たちにとって、とっておきの思い出が紡がれる夏休み。コロナ禍のせいでせつかくの夏休みも水を差された感じ。

「夏休みの友」 私たち団塊の世代、一学期の終業式に渡される宿題。数科目の宿題が1冊の本になっている。絵日記、お天気の記録、自由研究。絵は大体母親が手伝い、自由研究は姉や兄のお下がり、植物採集や昆虫採集。何回も使っているので葉の先や虫の足など取れていたりする。1日伸ばしに放っておいた「夏休みの友」夏休み終盤に入るとがぜんその存在が重くなる。明日は始業式ともなると家族も総出で宿題を片付ける。小学生の夏休み。大体そんな風にして過ごすことが多かった。親の商売の関係でほとんどかまってはもらえない。一人か連れと適当な遊びを考えて時間を過ごした。

風鈴、花火、夏祭り、金魚すくい、水中花、射的、蚊取り線香、天花粉。海水浴、プール、地藏盆。華やかで楽しいイベントと、原爆忌や終戦記念日、お盆のような寂しい生命にまつわる行事がないまぜになって夏の季節を彩る。

燃え盛る太陽の光は、やがて来る秋に多くの果実となって実を結ぶ。幼き頃の思い出の中で、夏が際立つのはなぜだろう。今年の夏もあつという間に逝ってしまう。

年を重ねると、ひと夏にわずかばかりの思い出すら作れない。そして、あきらめの夏はますます遠くに行ってしまう。あの頃の赤い風船はどこに行ってしまったのか。あの入道雲の向こうに消えてしまったのだろうか。

立秋 8月 9日頃

処暑 8月 23日頃



## 随筆 『龍馬と私』 ～龍馬に学ぶ 自己変革～

IT AIの時代。時の流れが早く、変化の激しい時代を生きるには、先を見透す目と知識が不可欠。組織の中で生き残るためには、PCのブルーライトに負けない体力と知力が必要となる。第三者に甘んじてはいけない。自分自身で時代に合う、技術と知恵を学び続け、血となり肉となるよう不断の努力を傾注しなければならない。つまり自己変革が必要なのである。これからの時代、辛苦に耐えて「今日の自分は、昨日の自分にあらず」といった気概をもって、時代の波を乗り切っていかなければならない。

豊かに育った世代には、なかなかの難関だと思う。しかし、アイデンティティ（存在証明）を持つためには、その厳しい闘いに勝利しなければならない。

私たちは歴史に学ぶことができる。坂本龍馬は、幕末に生きた「自己変革」の人であった。龍馬は変革の必要性を、歴史の必然として、受け止めることができた、当時では、珍しい日本人であった。

龍馬にはわかりやすいエピソードがある。友人の檜垣清治と行き会うたびに自己変革していた有名な話。つまり「長刀から短刀」「短刀からピストル」「ピストルから万国公法」。龍馬の短い一生は大体四つの時代に分けられる。

第1期 土佐の町人郷士として育った時代

第2期 尊王攘夷の志士として活躍した時代

第3期 ヨーロッパ航海術の修行の時代

第4期 日本の新しい国家体制を模索し、構想しその実現のための政治思想を完成させる時代

第1、第2が刀、第3がピストル、第4が万国公法（法律＝民主主義）

今の時代と同じような混とんとした閉塞感のただなかにあった、幕末という時代に龍馬は見事な自己変革によって幕末の英雄となった。龍馬の「自己変革」の源泉となったのは、なんだろうか。郷士という低い身分、土佐という田舎、外圧（黒船）の来航、封建制度の崩壊。こういった状況の中で、龍馬にとって信じられるのは自分自身だけであった。自分に期待するしか他に生きる道はなかった。龍馬の幕末は、右か左かの二者択一ではなく「第三の道」の探求がすべてであった。自分を変えるエネルギーは「ゆるぎない信念をもって、日本をせんたく（洗濯）することであった。」人は自分の中に「鉱山」を持っている。その「鉱脈」を自分で掘ったのが龍馬であり、見事に掘り当てたのが龍馬であった。



## 播州日誌

### 戦争と平和

2022年2月24日、ロシアがウクライナに侵攻して既に5か月になる。戦況は1進1退を繰り返し、和平交渉も開かれることなく、膠着状態に陥っている。世界平和のために創立された国際連合。その中心メンバーであり、拒否権を持つ常任理事国のロシアが、国際憲章を踏みにじり戦争犯罪の摘発にも耳を貸さず、多くの国際的な批判の中で孤立している。国際連合の機能不全は今に始まったものではないが、ここに極まったという感じである。親ロシアの国や日和見的な国も存在するが、今やプーチンの戦争は、その落とし場所の目途も立たず混乱を深めている。

戦争に勝利のないことは、前世紀に学んだことである。当事国双方が敗戦国なのだ。

このままではロシアという国が、世界的規模の非難のもとで、亡国の道を突き進むことになり、歴史上最悪の悪魔の国の烙印が押されることになる。どう虚構を積み重ねても、戦争が継続され、多くの両軍の兵士が戦火に倒れ、民間人の死亡や負傷が続出している。クレムリンの独裁者は、荘厳な宮殿の中で、世界中の怨嗟の声を聴き、胸が痛むことがないのであろうか。犠牲者やその家族の悲しみの涙に心動かされることはないのであろうか。どんな正義の主張をしても、この現実の前では色あせたものに過ぎない。人間はかくも残酷な生き物であったのだろうか。

プーチンが悪で、ゼレンスキーが善であるというような、簡単な図式でこの戦争を見るわけにはいかない。追い詰められて核の使用に踏み切れれば、地球規模の災禍が待っている。人類を破滅から救済する手段はないのであろうか。

参議院選挙を控えた金曜日、選挙応援中の安部元首相が凶弾に倒れた。7月8日。そしてその日がそのまま元首相の命日となった。

元首相といっても過去の人ではない。与党の最大派閥の領袖でもあった、その政治的影響力は絶大なものがあり、現政権もその支持に支えられて存在している。結果論で批判することは容易い。それにしても、この要人中の要人の警護に抜かりはなかったのか。元々100か0かというのが要人警護の鉄則ではなかったか。前方に気を取られ、後方が手薄ではなかったか。後方道路には車が行きかう状況であったし、接近する不審者に気づかず防げず、2発の凶弾が放たれ、2発目の銃撃が致命傷となった。1発目と2発目の間隙の3秒。近くの警備員が要人を引き倒してでも身を守らなければならなかったはず。県警も警察庁も警護の不備を認め検証を続けている。県警本部長の首が飛ぶぐらいで済む話ではない。

コロナ禍の中、人流はとどまることなく増え続け、7月23日新規感染者は20万人を突破した。

「平和ボケ」という言葉がある。戦後77年を過ぎて、日本は戦火にまみれたことがない。憲法9条とアメリカの核の傘、日米同盟のもと平和が保たれたという。本当にそうだろうか。この度のロシアのウクライナ侵攻、中国の一带一路という名の大中華思想。台湾侵攻が現実味を帯びてきた。国民の窮乏に目をふさぎ、ミサイルや核開発にまい進する北朝鮮。これらは日本をめぐる「今そこにある危機」ではないか。同盟国アメリカといえども、自分の国を自分で守るといった気概を持った国を支援するものであり、おんぶにだっこの同盟などあり得ない。

それは、今のウクライナを見ればわかる。ウクライナは多くの犠牲を払いながら、自国の防衛に身を投じ、ロシアに徹底抗戦している。だからこそアメリカを中心とするNATOや西側諸国から支持され、武器の供与を受けている。

今の日本の国民の中で、祖国防衛に立ち上がれる人が、どれだけいるだろうか。憲法は自衛隊を軍隊とは認めず、また実戦の経験もない。私自身全く自信がない。平和な国日本でぬくぬくとこれまでの人生を過ごしてきた。銃をとり敵を撃つことなどできそうにない。



国際秩序を躊躇なく破り、他の主権国家を侵略する犯罪者のような国の存在、しかも日本のすぐ隣の国の侵略をどう防衛したらいいのだろう。

戦争と平和、それは紙一重のところに存在する。ウクライナの悲劇を対岸の火事として看過することなく、できる限りの外交努力と国力の維持、強い抑止力を持つ国として、日本を守り育てなくては「やがてわが身のウクライナ」ということになりかねない。危機感を共有し、政・官・民・産・学の叢智を結集して国難に当たるべき現実がここにある。

R4. 7. 24

## ～南国土佐を後にして～

### 第1回 「高知編」 横田先生

日付の記憶は定かではない。関西汽船は夕方に神戸の中突堤を出航。大阪湾を南下して紀伊水道を通過、室戸岬沖で外洋に出て土佐湾に入る。室戸岬を回る時に一番船が揺れる。午前中に浦戸を通過して高知港に入港。20時間近くの船旅だが、午後に出て翌日午前中につくという便利さで利用客も結構多かった。2等船室はカーペット張りの大部屋。姉の膝枕状態で朝を迎えた。デッキに出て大きく深呼吸。海の風が心地よい。穏やかな浦戸の小さな島影を縫って滑るようにして進む船。運命の扉を開くような感慨も何もない。9歳の私には高知での生活を思う余裕もなく、時の流れに身を任せていた。特に不安を感じてはいたわけではないが未知の土地での生活に

やや緊張していたのかもしれない。浦戸の海は静かで朝の光を浴びてキラキラと輝いていた。兩岸の緑は濃く、私なりの感覚としては、新しい生活の場所に抱きかかえられるような感じだった。

子供の私に詳しい事情はわからない。戦後復興の槌音はまだまだか細く、経済的に余裕のある家は少なかった。我が家の経済的な苦しさは容易に想像できる。南米のパラグアイに移民として国を離れた、母の弟が経営していた店（クリーニング店）を買収する形で後を継ぐことになった。このことで後日おじさんからかなり厳しい金の請求があったところを見ると、こみいった契約であったことが想像される。姉に手を引かれて店に急ぐ。姉が一つ停留所を間違えたため結構な距離を歩いた。船旅の疲れもあってもうへとへの状態だった。

家は2階建て、店舗作業場付き住宅という感じ。玄関に受付のカウンターがあり、奥に住居、手前に洗濯場と仕上げ場（アイロン台が2~3台）。そう立派な家でないことは分かったが、神戸の家よりは間口も広く全体に広さがあったように思う。暑い夏の1日が終わり、高知での生活がいよいよという感じで始まった。番頭さんが一人いたので仕事の引継ぎはうまくいった。両親や兄や姉は何かと大変だったと思う。ぜいたくを言える時代でもなく、姉や兄たちは親に従ってよく仕事を手伝っていた。わけのわからない私と弟は言われるままに手伝うことしかできなかった。

やがて夏休みが終わり9月1日の始業式に初登校。記憶に残っているのは、校庭で全員朝礼の時の様子。転校生のうわさは一斉に広がり、私は多くの同学年の子供たちの注目の的になっていた。号令に合わせて整列、おどおどと「前へならえ」をする自分の姿が鮮明に残っている。こうして潮江東小学校での小学生生活が始まった。担任の先生は横田先生。若くて元気いっぱいの女の先生だった。「国語の教科書が足りないな。どうしよう。」その時付き添っていた母が、家で手書きで書き写すから1日だけ本を貸してほしいと申し出た。姉3人が力を合わせて教科書を手書きで写し、1冊の本にした。翌日それを見た先生が感心して、教育熱心なご家族ですねと喜んでくれた。

何とはなしにスタート切った感じだったが、1か月もたないうちにあることに気が付いた。それは高知の学習進度が約1か月神戸に比べて遅れているということだった。聞き覚えのある教科の内容に、私は大きな自信を持つことになった。今のように全国的にTVが普及しているわけでもなく、都会である神戸と、地方都市である高知との学力差は、歴然としていた。どちらかという「普通」ランクであった私が「優等生」枠に入れたのである。社会科の地理のところで子午線の話が出て、東経135度が通る市の名前「明石」が板書され、何人かの子に読み方を聞いた。私は地元の話だからとうぜん「あかし」と読める。珍答、誤答が続出した。「めいせき」「あかいし」「あかせき」なかなか正答が出ない。そのとき先生が、福留君は神戸からの転校生だから読めるでしょと指名された。「あかし」と大きな声で読み上げそれが正解だとわかると大きな拍手が教室中に響いた。そんなことが幾つかあって、学年の中ではちょっと有名になった。3学期には級長に選ばれ、クラスで「気を付け」「礼」「着席」の号令をかけたり、何かとクラスをまとめる仕事がまわってきた。

そう、あまり目立つことがなかった自分が、大いに目立つ存在になったのだ。おだてられて前に進む性格の私にはぴったりの環境で、成績も向上した。



## 夏季休業のお知らせ

8月11日(木祝)~8月16日(火)までです。

なお労災等緊急の場合は当事務所までご連絡お願い致します。

